



〒 242-0007 大和中央林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL <http://edventure.jp/>

今必要とされる解決の糸口

なんか真面目に日本の国が心配になりませんか？

統一教会との関係は結構ズブズブなはずなのに知らんぷりをして、結局辞任した Y 大臣。自民党全体にそうした関係が広まっていたのか、ご本人は別に悪びれた様子もない。そして次は法務大臣。「死刑のハンコ押すだけ」というのだから、これもスゴイ！こんなこと冗談めかして言っちゃうんだ、と置いていたらさすがに辞任。そして今度は政治団体の領収書の名前が、すでに亡くなった人の名前と印鑑だというから驚き。そんなことしても平気なのか、と置いてあきれていたら、当の大臣は結構言い訳がうまくて、断定しながら話すので変に感心してしまう。自分だったらきっと緊張して声も震えてしまうだろうと思うのだけど、堂々としているところに憎らしささえ湧いてくる。本当に、日本の政治家って何なんだと思っているのだが、まだまだこれからも続きそうではないか。

ところがどっこい、そんなことに目が向いていたら、有識者会議から、日本の防衛のためには軍備を増強し、敵基地攻撃能力を持つべきだし、そのための財源は増税すべし、という提言が出た。有識者会議とはいっても、政府の意向を受けた結論ありきの会議。遠慮なくさらっと結論が出されたことにびっくり。えっ、ホントにいいの？もう憲法は無視するってこと？私たちの税金集めて、他国を攻める武器を買うの？武器が平和を生むという議論（抑止力）が幻想なのは、もう何度も歴史が証明しているではないか。それなのに、冷戦時代に戻ったように、「仮想敵国」の脅威を語り、軍備を増強する。いつか来た道へ後戻り。大臣達がやっていることや、この国が今進もうとしている道を、子ども達にも全部しっかりと伝えてあげなければいけないのではないかとさえ思う。だって、これらはみんな日本の未来につながる話であり、未来を生きるのは子ども達だから。



ロシアのウクライナへの侵略は今も続いているけれど、あの戦争はロシア対ウクライナ？それともプーチン対ウクライナ？どう考えてもロシアの国民の総意でウクライナに攻め込んだとは考えられない。プーチンという超権力者の独断としか思えない。この「超権力者」は徐々に世界に増えつつあるのかもしれない。中国もその動きだし、アメリカのトランプだって目指すのは超権力者なのだろう。日本でも、ついこの前国葬になった人はその流れかもしれない。強い一人の指導者が国を率いることで、直面する様々な課題をクリア

し、発展させることができるという発想である。経済界ではもう当たり前の考え方で、大企業を統括する多くの存在がスポットライトを浴びている。まるでその会社はその人の持ち物のようだ。こう見てみると、世界の流れはスペシャルに優秀な個人のリーダーシップを求める時代になっているといえる。もちろん最後には矛盾が露呈してしまった例もある。例えば日産のゴーンさんなどはそれだろう。

組織的な課題をクリアするために、優秀な一人の人材にゆだねるといふ発想だが、我々庶民においても、それぞれがぶつかる課題に対して、自己責任をベースに、個人が強くなることで乗り越えることを強く求められる時代になったように思う。

こうした状況を背景に、一般社会や企業内において、精神的な疾病を発症してしまう例がどこにでも見受けられる。もちろん学校現場でも例外ではない。児童生徒への日々の指導、保護者への対応、校内の人間関係・・・そういった様々なストレスから発症してしまう先生も多い。いつ自分が精神的に追い詰められても不思議ではない、という現実を抱えつつ先生方は毎日の教育活動に向かっているのだと思う。いつも心の中は不安でいっぱい。しかも、そうした不安を自分で（自分だけの力で）乗り越えなければいけない環境におかれてしまっている。課題を解決するためによりスーパーな自分が求められてしまうのだ。自己責任という言葉の、なんと残酷なことか！

どうしてこうなってしまったのだろうか。うまくいかない課題を誰もが背負いながらも、みんな同じ不安を感じ、それでも個人の力量が最後まで問われる職場なんて、教育現場にふさわしいとは思えないのだが…。

白戸三平という漫画家の名前は、聞いたことがあるだろうか。だいぶ昔に流行った忍者ブームの火付け役ともなった一人だが、彼の代表作に「カムイ伝」がある。ご存知の方も多いと思う。大作で未完のまま作者はこの世を去ったが、この作品は江戸時代の身分制社会の中で、それぞれの身分に抗いながら幸福を追求する人間群像が描かれている。社会的なテーマを取り上げた漫画（劇画）である。図書室や中学校の教室にも良く置かれていた。

登場人物も各階層を代表する人物が多く登場するのだが、その代表が「カムイ」と「正助」である。カムイは非人という被差別部落の出身。正助は貧しい農家の息子である。

カムイは非人という階層からの脱出のために忍者になる道を選ぶ。それは、自分の力量によって宿命（身分）に逆らい、逃れようとするのである。厳しい修行の果て、彼は天才忍者として認められていく。

漫画やドラマには、このカムイのパターンが多い。主人公が目の中の大きな敵や壁に対し、よりスーパーな力を手に入れてクリアしていく、というストーリーだ。その代表的なものの一つが、主人公悟空がスーパーサイヤ人になっていく「ドラゴンボール」だろう。追い詰められるたびに進化を続けるその姿は、子ども達の憧れであった。

しかし、現実の世界ではなかなかそうはいかない。髪の毛が光りだして、スーパー○○になることなんてありえない。日々目の前の課題に対し、悩み苦しむ疲れていく。

忍者となって非人の世界から抜け出たつもりになっていたカムイだが、あることから「抜け忍」となったカムイは忍者の世界から命を狙われることとなり、逃亡の生活が始まるのだ。逃げ続けるだけの生活。それがカムイの人生として描かれる。

いっぽう、農民の正助は違う道を歩む。農民でありながら、独学で学問し続ける正助は、農民の過酷な境遇を変えるために多くの改革に着手する。仲間や子ども達を集めて学問を続ける一方、大人たちには、協力して計画的に農作業に従事する方法を広めていく。商品価値のある作物を育て、商人とも交渉する。農村改革を進め、それは実を結び始めるのだが、改革が進めば進むほど藩は過酷なほど絞り上げようとする。やがて、抑圧された農民たちは百姓一揆へと向かっていく。

個人の力量を高めることで身分の縛りから逃れることを企図したカムイと、共通する負の状況を当事者たちが手を取り合って支えあい、協力し合うことで豊かさを実現しようとした正助！全く正反対の道を選択した二人であるが、それでもそれぞれに思い描いた通りの未来の獲得には、残念ながら至っていない。そうだとすると、私たちはよりどちらに可能性を見出すのだろうか。

一人のスペシャルな人材が組織を引っ張ることが良い結果を生み出すことになるとは思えない。また、自己責任の下、個々人が目の前の課題に対し、己の力量を向上させながらクリアしていくべきだとも思えない。みんな当たり前の人間だし、当たり前の人間でいいのだ。当たり前の人間が知恵を出し合って、課題を解決するために「組織」があり、システムがあるべきなのだ。子ども達に「お互いの支えあい」を語る前に、学校現場で先生同士が上手に支えあえているかどうかを是非検証してほしい。自分という個人は自信がなくても、仲間を信頼し、頼ることはできるはずだ。

国際社会も、企業も、政治も、そして私たちの毎日の生活場面でも、同じ課題が浮かび上がってきているように思う。

人は孤独になってはいけない。古い言葉かもしれないが・・・連帯を！

これからのEd.ベンチャーの学習会

【理論学習会】12月17日(土)13:00~15:00 自分なりに学校の具体的な改革を試みる

【インクルーシブな社会を目指す学習会】

12月7日(水)19:00~21:00 事例研究:インクルーシブなクラスづくり

【理事のつぶやき】 なんだろう…なんだろう…。最近、子どもが生まれ、親という言葉に対して問いを持つ。親としてできることってなんだろう。そもそも親の定義ってなんだろう。育児、家族、家事、仕事。嵐のような日々。子育てをしていく上では、人とのつながりや情報の得方と選択、ある程度の知識が必要だと感じる。そうでなければ、社会から孤立しこぼれ落ちてしまいそうな気がする。誰にでも安心して子育てができる社会とはなんだろう。(T.B)